

コロナ禍 海外留学やり切った

神戸親和女子大

体験学生が報告会

北 区

「やり遂げた自分を誇りに思う」「海外留学の夢がかなってほっとした」。

新型コロナウイルス感染症拡大への懸念から全国的にも海外留学が激減する中、神戸親和女子大（北区鈴蘭台北町7）では、周到に準備を重ねて送り出し、このほど1年ぶりに帰国した留学生の報告会が開かれた。

同大の国際コミュニケーションコースはオーストラリア・西オーストラリアへの1年間の留学が必修となっているため、それを目的に他府県から入学してくる生徒もいる。ところが同国の入国制限で、あえなく中止になるところを、急ぎよ行き先を変更。アイルランド・国立コーク大が受け入れてくれることになり、31人が昨年2月14日に飛び立った。

この日の報告では折からのウクライナ侵攻でホーム

格段に英語上達、「視野も広がった」

ステイ先が難民を受け入れた影響を受け、二転三転したり、英語のなまりが聞き取りにくく「バスという単語も聞き取れない」ことが

あったりと、波乱含みのスタートだったことがうかがえた。中には早々に「日本に帰りたい」とSOSを出す学生も出たが、夏休みのサマースクールが一つの転機になったという。

「一緒にグループになったフランス人の学生たちに大きな影響を受けた」と野上莉央さん(21)は話す。「留学して初めてできた外国人の友達。英語のTOEFLのテストでも向上心が強く満点を取るまで努力する。あきらめず、世界視野でものを見る彼らに刺激を受けた。自分も思考は日本にとどまらなくなり成長した」と話す。



英語のスピーチで帰国報告する学生たち。語学力は格段に上がった＝神戸親和女子大

また大村琴和さん(20)は「人と比べることなく、自分のいいところを見つけて堂々と生きるアイルランド人はかっこよかった。内気な性格が変わりました」と声を弾ませた。

同大では「困難を乗り越え、たくましく帰国した。今後も留学生の貴重な体験を支えていきたい」と話している。(鈴木久仁子)